

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：84604

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520141

研究課題名(和文)「鎖国」下の日本における清朝陶磁の受容とその影響に関する調査研究

研究課題名(英文) Studies on Qing dynasty ceramics imported to Japan under the policy of "sakoku".

研究代表者

尾野 善裕 (ONO, Yoshihiro)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・考古第二研究室長

研究者番号：40280531

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：出土品と伝世品両面の調査を通して、18世紀終盤以降日本へ輸入されている清朝陶磁の絶対量が増加していることを確認し、その背景にこれまでも指摘されていた煎茶にとどまらず、茶の湯も含めた中国趣味の流行があったことを指摘した。また、長崎貿易での清朝陶磁の輸入が低調であった17世紀終盤から18世紀中盤にかけて、琉球・薩摩経由で清朝官窯製品が輸入され、徳川將軍家を含む貴顕への贈答に用いられていたことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Through an investigation of excavated artifacts and passing down to posterity items, it was confirmed that the quantity of Qing Dynasty ceramics imported to Japan after the end of 18th century is increased. This phenomenon was caused by the fashion of the Chinese hobby in Japan. We can find its influence in the sencha tea utensils as well as tea ceremony utensils. From the end of 17th century to the middle of 18th century, Qing Dynasty ceramics imported to Japan via Nagasaki was very little, but some Kuan wares (official wares for use at the imperial court) was imported via Ryukyu and Satsuma. The Satsuma Clan was using Kuan wares for a present to an aristocrat and Tokugawa shogun.

研究分野：考古学

キーワード：鎖国 日中交流史 陶磁器

1. 研究開始当初の背景

(1) これまで「鎖国」という閉鎖的イメージの中で捉えられてきた江戸時代にも、日本が対外交渉を通して様々な文化的な影響を受けていたことについては、近年主に文献史学の側から問題提起がなされ、研究も進められてきている。しかし、実際の器物に関する研究は、すこぶる限定的である上に、ヨーロッパの文物に著しく偏ってなされている感がある。しかし、既に文献史学の研究が明らかにしてきているように、「鎖国」下の日本へ来航していた海外の船舶は、オランダ船よりも中国船（唐船）の方が圧倒的に多かったものであり、それらの船舶がもたらした中国の文物を抜きにして、江戸時代の海外交流を語ることに適切であるとは思われない。そうした観点に立ったとき、各種の文物の中でも素材的に強靱な陶磁器は、土中であっても腐食により失われることがなく、遺跡からの出土品によって破損して廃棄されたものまで包括的に研究できるという点で、他の材質の文物と較べて圧倒的に研究が進めやすい環境にある。

(2) それにもかかわらず、これまでの清朝陶磁に関する研究では、(現代的観点から)官窯製品以外は美術品としての価値が低いとして、ほとんど採り上げられてこなかった。このため、江戸時代の日本へ輸出されていた中国民窯製品の実体については、一部の煎茶道具を除くと、ほとんど明らかになっていないのが実情である。しかし、多量の清朝陶磁が日本へもたらされたのは、現代的観点では必ずしも高く評価されない民窯製品の中にも、江戸時代の日本人がなにがしかの「美」なり「価値」を見いだしていたという背景があったからに相違なく、この点については、同時代の日本陶磁の中に少なからず清朝陶磁の影響を見いだすことができることから裏付けられる。

(3) こうした美術史側の研究動向に対して、考古学側からは徐々に遺跡からの発掘調査出土事例が積み上げられつつある(『貿易陶磁研究』No19、日本貿易陶磁研究会、1999年)。しかし、日本における考古学的な清朝陶磁の研究は、未だ都市遺跡ごとの出土事例の紹介・集成にとどまっており、伝世品と出土品を統合した研究には至っていない。出土品の大半は廃棄されたものであり、特に珍重される種類のもの大切に保管されるが故に、滅多に遺跡からは出土しないという特性を考えれば、江戸時代の日本が受容した清朝陶磁の全体像を明らかにするためには、両者を統合した研究こそが必要であろう。

2. 研究の目的

(1) 本研究の第一の目的は、これまで美術的な価値が低いとして等閑視されがちであった中国・清時代の民窯陶磁器、中でも特に伝世品を日本の海外交流研究の基礎資料として意識的に研究の俎上に載せ、おぼろげでは

あっても、江戸時代の日本へもたらされた清朝陶磁の全体像を認識できるようにすることにある。

(2) 第一の目的の達成を通して、清朝陶磁輸入の時期的推移(動向)を把握することが可能になると考えられるため、その変化を惹起せしめた歴史的な背景へと考察を進めることが第二の目的である。

(3) そして、やはり第一の目的の達成を通して認識された輸入清朝陶磁の実像を踏まえ、江戸時代の日本陶磁との比較検討を行い、いかなる影響が認められるかを検討することが第三の目的である。

(4) 以上の目的の達成を通して、旧来の「鎖国」史観を克服した近世日本の対外交渉の実像を描き出すための一助となすことこそ、本研究の最終的な目的である。

3. 研究の方法

(1) 出土品に関する調査を全国にわたって悉皆的に行うことは個人の能力の限界をはるかに凌駕するため、おおよその傾向を掴むべく江戸・大坂・京都・長崎・沖縄の5地域で実物調査を行い、先行研究によって詳細な年代推定条件が整っている江戸・京都については、特に時期別の清朝陶磁の実体を把握することに努めた。

(2) 伝世品については、国内の旧家の中でもまとまった資料が良好な状態で保存されている野崎家(岡山)・究理堂(京都)・個人宅(大阪)で陶磁の悉皆調査を行い、既に所蔵品台帳が整備されている尾張徳川家(愛知)・田中本家(長野)・角屋(京都)・静嘉堂文庫美術館(東京)では、特徴的な清朝陶磁について補足的に調査を行った。

(3) 清朝陶磁と比較する日本陶磁としては、特に京焼・有田焼・鍋島焼・現川焼・珉平焼・万古焼・東山焼・薩摩焼を取り上げ、九州陶磁文化館・九州国立博物館・久保惣記念美術館・兵庫陶芸美術館などにおいて、清朝陶磁からの影響が想定される陶磁器の調査を行った。

4. 研究成果

出土品の調査を通して、18世紀終盤から清朝陶磁の輸入量が目立って増加することを確認した。この現象は、江戸遺跡出土の清朝陶磁に関する研究を通して、既に指摘されていたところであるが(堀内秀樹 1999「江戸遺跡出土の清朝陶磁」『貿易陶磁研究』No19)、京都においても同様であることが確認できたことから、江戸にとどまらない日本全体の傾向であったと推察される。

こうした遺跡における出土品の傾向を踏まえ、伝世品との比較検討を行ったところ、出土品には煎茶碗や小皿など数物の小型器形が圧倒的に多いのに対して、伝世品には花生・水指・鉢・釜敷といった大型の器物が目立つ上に、金継ぎなどの補修が施されているものが多いことが判明した。これは破損した

際に、花生・水指など大型器物の場合補修してでも伝世させるのに対して、小型の数物の場合には廃棄される確率が高いことを示していると考えられ、江戸時代の日本へもたらされた清朝陶磁の全貌を把握する上で、やはり伝世品の調査が必要不可欠であることが確認できた。

また、伝世品に散見される長文の銘文を検討したところ、日本からの注文によって江西省の景德鎮で焼かれたという事例が少なからず見いだされた。それらの銘文に記された年号からは、清時代でも乾隆年間(1736-95)末期以降に、日本からの注文が相次いだことが知られ、年代的に日本へ輸入された清朝陶磁の絶対量が増加する時期とほぼ一致していることが注目された。これら一連の動向の背景には、当時の日本における中国趣味の流行があると考えられ、江戸時代後期の中国趣味の流行については、これまでも煎茶の普及と絡めて論じられている。

しかし、乾隆年間末期から嘉慶・道光年間(1796-1850)にかけて、中国景德鎮へ注文されたことが銘文から確認できる器物の多くは、水指・釜敷・香合・向付など圧倒的に茶の湯の席で用いられる器が多い。しかも、伝統的に茶の湯で珍重される古染付・祥瑞・呉州手といった明時代末期の中国陶磁の写し物がすこぶる目立つことは、江戸時代後期の中国趣味の流行が煎茶だけにとどまるものではなく、茶の湯の道具にも濃厚に認められるほどの広がりをもっていたことを示している。

こうした江戸時代後期の茶の湯における中国趣味については、これまでいささか等閑視されてきた感があるが、これは大正年間(1912-26)から昭和年間(1926-89)初期の日本におけるナショナリズム高揚の中で、茶の湯がことさらに日本的文化として強調されたことと無関係ではないだろう(後掲雑誌論文)。

当初、本研究は江戸時代の日本へもたらされた清時代の中国民窯製品の実体と日本陶磁への影響を解明することに重点を置いて進めていたが、予想外の大きな発見は江戸時代の日本へ清朝官窯製品がもたらされていたことである。代表的な事例としては、偶然ではあるが本研究期間中に本務(京都国立博物館特別展覧会の事前調査)の一環として調査する機会を得た近衛家伝来(京都・陽明文庫所蔵)の「金瑠瑯」と呼ばれる色絵磁器の馬上杯を挙げることができる。

この馬上杯については、山階道安の『槐記』によって、享保13年(1728)4月3日の茶会で近衛家熙が用いたことが夙に知られていたが、『槐記』の記述を詳細に分析した結果、近衛家久が妻の実家である薩摩藩島津家からの献上品を、父親である家熙に譲ったものであることが判明し、薩摩藩からの献上は家久が閑白に就任した享保11年(1726)であった蓋然性が極めて高いと考えられた。

さらに、『槐記』で「金瑠瑯」と呼ばれていることに注目し、東アジア圏で陶磁器に関わる「瑠瑯」という言葉の用例が、清朝官窯製品の中でも、宮廷工房の瑠瑯作で絵付けされた一群を指す事例しか見当たらないことに注目し、清の皇帝から琉球王へ下賜された清朝官窯製品が、薩摩藩を介して近衛家に献上されたのではないかと推定した。

そして、この推定にあたっては、琉球国の王城であった首里城から清朝官窯製品が少なからず出土していることと、かつて鹿児島に存在していた琉球国の出張所たる琉球館の関係者覚書(『琉球館文書』187)に清朝官窯製品が薩摩藩へもたらされていたことを示す記述があることを傍証として挙げた。

この見解については、本研究の中間成果報告と位置付けた京都国立博物館の特別展覧会『魅惑の清朝陶磁』に合わせて作成した図録(後掲図書)や雑誌論文(後掲雑誌論文)を通して公表に努めたところ、海外から反響があり、台湾の国立故宮博物院が所蔵している酷似品の存在と、清時代の公文書(檔案)の記載を通して上記推定の妥当性が確認されている(謝明良「關於金瑠瑯靶碗」『故宮文物』372)。

また、輸入された清朝陶磁が日本陶磁に与えた影響については、京焼・有田焼・現川焼・万古焼・珉平焼・東山焼など広範に認められることを確認すると共に、鍋島焼や薩摩焼に清朝官窯製品との意匠的な共通性が認められることを指摘した(後掲雑誌論文)。

なお、前述したように京都国立博物館の特別展覧会『魅惑の清朝陶磁』は基本的に本研究の成果を基礎として企画・立案したものであり、共催新聞社と開催館の支援を得て、さらに国内3会場(長崎歴史文化博物館、奥田元宋・小由女美術館、パラミタ・ミュージアム)を巡回させ、本研究成果の公開促進に努めた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

尾野 善裕、仁阿弥と頼川：京焼陶工にとつての建仁寺、陶説、査読無、741、2014、pp.11-14

尾野 善裕、いわゆる「新渡物」にみる茶の湯の中国趣味、陶説、査読無、734、2013、pp.26-30

尾野 善裕、清朝官窯と近世日本、陶説、査読無、728、2013、pp.19-26

〔学会発表〕(計1件)

尾野 善裕、清朝官窯と薩摩金襴手、第26回伝統白薩摩研究会 2014年12月20日

〔図書〕(計2件)

安河内 幸絵、尾野 善裕、サントリー美術館、天才陶工 仁阿弥道八、2014、264

尾野 善裕 他、読売新聞社、魅惑の清朝陶

磁、2013、264

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

http://www.kyohaku.go.jp/jp/kankou/haifu/yomimono_data/0076.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

尾野 善裕 (ONO, Yoshihiro)

独立行政法人国立文化財機構・奈良文化財研究所・都城発掘調査部・考古第二研究室
長

研究者番号：40280531

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

佐藤 隆 (SATO, Takashi)：平成23年度

公益財団法人大阪市博物館協会・大阪文化財研究所・長原事務所長

研究者番号：50344362

(4) 研究協力者

佐藤 隆 (SATO, Takashi)：平成24-26年度

大阪市教育委員会・総務部・文化財保護課・主任学芸員

平尾 政幸 (HIRAO, Masayuki)